

太宰治『斜陽』における滅び

——天皇制を中心に——

A ruin about “Shayou” Osamu Dazai
—Focusing on the modern Emperor system—

仙田 悠紀乃
Yukino Senda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 言語文化学専攻 修士課程

キーワード：太宰治, 滅び, 思想

Key words : Osamu Dazai, Perish, Thought

1. 研究目的

本研究は、太宰治『斜陽』を天皇制との関係を中心に焦点をあてて、太宰の独自の思想について考察する事を目的とした。また『斜陽』前後の太宰の作品や、他の関連する文学作品を用いて分析する事によって、作品を貫くテーマである「滅び」の内実を探った。この研究により、従来の研究で述べられてきた解釈に、新たな読みの広がりを示す事を目的とした。

なお本年度の研究は12月に行われた院生発表会での発表を一つの目標として進めてきた。

申請当初の課題とした太宰治『斜陽』は戦後の作品である事や、テーマ自体が大きすぎるとのご指摘を受けた事を踏まえ、戦後を論じるためには先ず太宰が戦時中どのような作品を発表していたか、また当時の日本の状況と太宰の関わり方を掴むことが基礎的な知識として重要であるという思いに至った。

その結果院生発表会では、戦時中に青年向けメディアとして勢いのあった雑誌『新若人』に掲載された太宰治「散華」に注目し研究を進めた。

太宰治「散華」は、昭和19(1944)年3月1日発行の『新若人』第5巻第3号に発表された。その後、同年8月20日発行の短編集『佳日』に収められる。「散華」を考察するにあたって『佳日』との関係についても考慮する必要があるが、本研究では『新若人』に焦点を絞って掲載誌と作品の関係を明らかにする事を目指した。

2. 研究実施内容

(1) 「散華」に関する先行研究の把握

はじめに、閲覧可能な限りすべての「散華」論を調査すると、「太宰研究者がこれまでほとんど問題にしてこなかった作品」(北川透)「「散華」が長い間まともに論じられずに来たことは不思議に思える」(権錫永)など、「散華」に関する先行論が他の太宰作品に比べてかなり少ないことがうかがえた。

またこうした少ない先行論の殆どにおいて登場人物である「三田君の戦死」と「三井君の病死」を比較し、その両者の「死」を等価のものとして捉える傾向と、「戦死」(「純粹の献身」)と「大いなる文学のための死」を等価のものとして結論付ける傾向が見られた。

複数の先行研究に共通する指摘は、三井の死の場面は詳細に語られているのに対し、三田の戦死は具体性に欠けているという点である。また「大いなる文学のための死」と「三井の病死の必要性」に着眼した研究も複数見られたが、それぞれの結論にさらに検討を加える事が可能であると言えるのではないかと考えた。

(2) 雑誌『新若人』についての調査

まず、『新若人』の概要を調査すると共に当時発刊された実物を閲覧した。創刊号によって雑誌を発刊した目的が明らかになり、また雑誌に携わった人物らの社会的な立場なども把握できた。その結果、雑誌『新若人』はこれから軍人となってゆくであろう青年を読者対象とし、

「強力国家」を目指す青年を育成するための「國策的」な雑誌として創刊された事が確認できた。

また学生同士の友情や、兄弟、夫婦といった国民の日常的な人間関係がそのまま戦争や国家の為の団結へと直線上に並べられている事が読み取れた。

(3)太宰治「散華」における登場人物の事実確認

登場人物、三田循司による遺稿集『北極星』と戸石泰一と太宰の書簡での交流などが確認ができた事から、三田と戸石が実在した人物であり、太宰と直接関わりのあった人物である事が明確になった。しかし三井君についての情報は見つからず、また作中においても苗字のみでしか登場しない事などを踏まえると、三井君は太宰が意図的に作中に登場させた架空の人物である可能性が極めて高い事が予想された。

また戸石泰一による作品「玉砕」『小説朝日』(9月号、第2巻第10号、昭和27年9月1日発行)を把握する事ができた。さらに同作品に引用されている三田が戦地から太宰に宛てた手紙を確認すると、太宰治「散華」において同一のものと見られる三田の手紙とは一部文章が異なっている事が明らかになった。

太宰治「散華」における三田の手紙は以下の通りである。「御元気ですか。遠い空から御伺いします。無事、任地に着きました。大いなる文学のために、死んでください。自分も死にます。この戦争のために」

戸石泰一「玉砕」における三田の手紙は以下の通りである。「先生 死ンデ下サイ 文学ノタメニ 私モ死ニマス 大イナル戦争ノタメニ」

「大いなる」という語には、偉大なる、立派な、という意味が含まれている。それを踏まえれば、太宰が「大いなる」という言葉を「文学」の方に付け変えた事は一つの着目点となり得るのではないだろうか。

どちらが手紙をそのまま引用したのかについての事実は不明である点には注意が必要であるが、戸石泰一「玉砕」と太宰治「散華」における手紙の比較について言及されている論文は調査の限りでは見られなかった為、本研究における小さな収穫であると考えたい。

作中で語られる、三田の戦死と三井の病死に対する「私」の感動の内実を、

先行論と作中の言葉を踏まえつつ分析すると、「散華」における〈文学のための死〉は、文学を全うして死を迎えるという死だけではなく、

自由に言葉を使う事が出来ない時代を、時には自分の意思を捨て言葉を利用しながらも生きていかなければならないというもう一つの意味も含み持つと考えることが可能ではないだろうか。「私」は三田の死に感動したのではなく、最後の手紙の文章を書いた三田の、覚悟や心の強さ、純粋さ、といった内面に感動し、評価したと考えられる。

「私」が感動した三田の内面の美しさというものが、掲載誌『新若人』や国家が掲げる〈戦争のために死ぬ〉青年の理想的な姿と重なる。

三田の心を評価した事と、戦争賛美というものが、検閲の眼にはすり替えられて映ったと考えられる。そして検閲のその読みが起こりうる事を、太宰自身もわかっていた上でこのすり替えを利用する事によって、三田の死を悼み、検閲の眼を逃れながら発表に至る事を可能にしたのではないだろうか。

また「大いなる文学」と書き換えた事には、文学のために自分の使命を果たすという自分自身の決意と、芸術(文学)を重んじたいという思いが込められているのではないだろうか。

3. まとめと今後の課題

以上本研究では、掲載誌『新若人』の性質と人物の事実関係の把握と共に、戸石泰一による「玉砕」などの資料も加えながら太宰治「散華」の考察を進めてきた。

「散華」では、〈玉砕〉によって戦死する事自体を〈美しさ〉と結び付けてはいないという事、「私」は「三田君」の〈玉砕〉ではなく、決意や心意気といった内面に感動したという事が明らかになった。

掲載誌と作品の関係についても、すり替えを見出す事によって、相互関係を捉える事が出来たのではないだろうか。「三田君」の〈戦争のために死にます〉という手紙を作中に載せた事はこれから兵士となって戦地へ向かうであろう〈青年〉たちを読者対象とした雑誌『新若人』にとって、青年の手本を示す事が出来る好都合なものだったと考える事もできるのではないだろうか。

本研究では、太宰治の作品の中で、戦時色の

強い雑誌に唯一掲載された「散華」に着目し考察を進める事によって、当時の日本の状況を自分の中で明確にし、感触を掴む事ができたと感じる。しかしながら、「散華」における研究はわずかしか無く、引き続き研究を進め修士論文のテーマの一つにしていく事は非常に困難であるというのも事実であると考えられる。

今後の課題としては、卒業論文で取り扱った太宰治『新ハムレット』を題材に、助成の申請当初の課題でもあった太宰自身の根本的な善悪の捉え方について、今回「散華」を研究する事で得られた時代的な知識などを糧に、改めて挑戦していきたいと考えている。